

話題提供 1：西川寿美

「日本語教育から見た日本の言語教育の問題」

科目を勉強するために必要な日本語力の育成

西川 西川でございます。いただいたテーマは何分にも非常に大きなテーマです。甲斐睦朗さんのお話にもありましたように、この第3専門部会では、国語教育の専門家の方と私たち日本語教育に携わっている者たちが共同研究の形をとって最終的には日本の言語教育の改善に向けた何かしら提案ができると良いということで、研究を重ねてきております。

今日いただいたテーマは午前中のお話を受けて、それを踏まえた上で、日本の言語教育のさらに大きな問題としてどういうことが考えられるかということでお話ししたいと思いません。

ただ、今までのお話を聞いておりますと、それぞれ報告なさった先生方、それからコメント下さった先生方、皆さんとてもきちん問題を整理してくださっていて、私がレジュメに書きましたことも午前中に話されたこと、あるいは午後に報告されたことと同じことを繰り返すようなことになってしまったな、と結果的には感想を持っております。できるだけ、簡潔にお話をして、後の話合いの時間がたくさん設けられた方がいいのではないかと思います。

まず、1点目に指摘したいこととしまして、これも何度も出てきたことですが、子どもが獲得する言語能力、これはいろいろなことばで言い表されてきたと思うのですが、生活言語の能力と教科を学習するための能力であるとか、太田垣さんの発表では一次的な能力と二次的な能力でしたか、さまざまなことばで言い換えられてきたと思うのですが、その中の後者の部分ですね、つまり、生活の言語ではなくて科目を勉強するために必要な日本語の能力の育成に関して、今、日本語教育の現場では非常に模索をしている状態です。そのための指導の方法論、どんな能力がその言語能力の核になるのか、ということもまだわからないし、そのための具体的な方法論もまだ模索している状態です。これは、日本語教育だけの問題ではなくて、小学校の特に低学年のレベルの日本人の子どもに対する言語教育の問題でもあるということも指摘されました。私自身もそのように考えます。

このために何が必要かということ考えたのですけれども、例えば午後の寺井さんのご報告のようなそれぞれの科目でどういうふうな日本語が使われているのか、あるいは今日の午前中に水谷さんのお話がありましたけれども、認知心理学では認知とことばに関して、ここ20年ぐらいの間に著しい研究成果が上がっていると聞いています。そういったような関連領域の研究成果と関連させながら、問題を整理していくことができるのではないかと思います。

現場の教師による研究を

それから、もう一つ、この問題を考える上で気になることとしましては、今日お隣りに

いらっしゃる山田さんとお昼ご飯を食べながら雑談をしたのですけれども、例えば、国語の指導をさなっていて、子どもたちがわからない、教師というのはおおむね学生時代にはそれなりに優等生であった、勉強のできる人だったので、子どもたちがわからないという実態がわからない。子どもたちがわからないことをことばで表現できないこともわからない。そういったことについて、本当は現場の先生方が一番良いデータを集める機会をお持ちだと思うのですね。「現場の先生方がそういうことをもう少し突っ込んで研究するような余裕がないのですか」と伺いましたところ、山田さんの方からは「現状では、なかなか難しい」というお話がありました。理想論としましては、学力に必要な日本語能力の育成についてはこういうところで研究がなされるべきでしょうけれども、同時に現実の問題として、教育現場で何が問題なのか、どうしてそういった問題に対処できないのか、というような具体的な方策のレベルでも考えてみるべき問題ではないかと思います。

母語の能力の維持・育成

それから、2 つ目に提案したいこととしましては、足立さんのお話、あるいは柳澤さんのレジュメの方にも書かれていたのですけれども、外国人の子どもの母語の能力の問題です。国語教育の内容とは、少しかけ離れるかもしれませんが、日本の子どもの言語教育の問題ということを考える上では、一つ意識すべき問題ではないかと思います。今、日本に住んでいる日本語を母語としない子どもたちの多くは、自分が持っている母語とそれから日本に来て勉強している日本語と2つの言語を使いこなしてバイリンガルになりたいという希望を持っていると思います。それに、果たして日本の学校教育、あるいは地域社会、社会が応えられているのだろうか。これは、足立さんの御発表にもありましたけれども、1 つには、教科の学力をつけるという意味で子どもの母語の能力というのは非常に重要な要因になっているということが指摘できます。それと、子どもたちの学習に対する意欲、あるいは自尊心、午前中のお話にもありましたけれども、そういうものを維持したり、あるいは育成したりしていく上でも重要なことではないかと思います。

それから、これはあまり話題にならなかったことなのですけれども、日本の社会全体としても、バイリンガルの子子どもたちが多く育っていくこと、特に、英語と日本語ではなくて、アジアの言語であったり、それから、南米のことばであったりというようなことば。日本語とそういった文化、あるいは言語に精通したバイリンガルが多く育っていくということは、おそらく日本の将来にとっては、非常に有益なことなのではないだろうかと私は個人的には考えます。母語の能力の維持や育成には、第一番目の問題と同様に、実行していくにはさまざまな問題があるわけなのですけれども、こういった観点から、言語教育を見直してみるとということが必要なのではないかと思います。

客観的に日本語を見る訓練を

それから、3 つ目は、「第二言語としての日本語について」という表題をつけました。これは私自身が今大学生を対象としました日本語の教師養成のプログラムを担当しているのですけれども、そのプログラムを担当していく中で、日々感じていることです。日本人の

子どもたちは、日本語という言語、あるいは日本という社会とか、日本の文化の特徴だとかを客観的に捉える訓練を、私自身もそうなのですけれども、あまりしてきていません。そして、大学生になって、日本語教育のプログラムを受け始めて、例えば、非常に基本的な日本語の助詞の使い分けであるとか、あるいは、類義語の意味の違いであるとか、というようなことを、これは学習者がどれも難しいと感じる点なのですけれども、そういうことを問うてみますと、そういうことは一度も考えたことがなく、客観的に説明することが難しいと感じるようです。日本の国語教育でこういうようなことがもっと前面に出てきて考える機会があると、自分が普段何気なく使っている日本語という言語をもう少し違った目で見える機会になったのではないだろうかという感想を聞くことがあります。言語教育の中で、優先順位の高い問題かどうかは別としまして、自分たちが使っている日本語という言語を客観的なものとして捉え直すというようなことが言語教育の一環としてできるのではないかと思います。これは、国語教育だけの問題ではなくて、英語教育という新しい外国語を学ぶ時に、自分の持っている言語を見直す機会にもなると思いますし、それから、単に言語の問題だけではなくて、日本人のコミュニケーションのスタイルだとか、行動様式だとか、そういったようなことを話題にしても、広い意味でのコミュニケーションの問題、言語教育の問題になると思うのですね。そういうふうな発想もこれからできるのではないかと思います。このことは、例えば、外国人の子どもたちが教室の中で与えられるだけの存在、援助されるだけの存在で、なかなかリラックスができないというようなことがありましたけれども、そういったことを改善することにもつながっていく姿勢なのではないかと思います。

日本的表現法と世界へ発信する表現力の両立

それから、最後に挙げましたのは、今日の午後の話題にもありましたけれども、表現力の育成ということで、私自身も自分の国語教育の経験を振り返ってみますと、やはり理解が中心であって、表現する機会はあまりなかった。特に、パブリックな場面で自分の意見なり考えなりを論理的に伝えるというような経験が多くはなかったように思います。ですから、例えば今日のよな場面に遭遇しますと、苦勞するわけですけれども、日本の伝統的な文化の中に、以心伝心だとか、言挙げせぬことだとか、表現しすぎることをあまりよしとしないような伝統的な価値観もあるのではないかと思います。そういった日本の伝統とそうでありながら、かつ世界に向けて発信していくといいですか、同じレベルで自分たちの思っていることや意見をきちんと言語で伝える能力とこの2つを両立させながら育てていくことが重要になってくるのではないかと思います。理想論に走った提言だと自分自身もこれを書きながら非常に思ったのですけれども、この辺りを出発点にして、先生方で、もう少し具体的なレベルの問題点とか、方策とか、そういったようなところの御意見をお聞かせいただくとありがたいと思います。

甲斐ム ありがとうございます。では、西川さんの問題提起は後で取り上げることにしまして、今度は甲斐雄一郎さんに国語教育に関する問題提起をお願いします。